

ミレニアム・プロミス・ジャパン 第15回研究会

チョコを選べば、世界が変わる 一人と環境にやさしいガーナのチョコレート事業について

【講師】 星野智子氏（一般社団法人チョコレボ・インターナショナル 代表理事）

【日時・場所】 4月27日（金）午後6時30分～8時30分
日本財団ビル2F 第8会議室

- 【概要】
1. カカオについて
 2. 活動の経緯
 3. ガーナについて
 4. チョコレボの活動
 5. DVD鑑賞
 6. 質疑応答

チョコレボとは、チョコレートのレポリューション、チョコレートの革命ということである。2006年からこの名前をつけて、自分たちもとても気に入っている。なぜチョコレートに革命が必要なのかというところと、今までの活動の経緯についてご紹介したい。

1. カカオについて

チョコレートの原料はカカオである。アフリカ等ではココアという風に呼んでいる。

チョコレートは、小さいお子さんからお年寄りまで、誰もが一口食べるだけで笑顔になることができる、とても身近な食べ物である。しかし、その原料のカカオがどこで作られているのか、どんな人が作っているのかということに関しては、意外と関心がないのか、知られていない。

カカオは、南北緯20度以内の赤道の近くにある熱帯雨林に生えている。中南米を原産とし、アマゾンの流域などで作られていた。森の中に生えている樹木の実の種からできている。この熱帯雨林の地域は、地球の温暖化にとっても、非常に重要な地域である。

Millennium Promise Japan

ミレニアム・プロミス・ジャパン

カカオの花は、5 ミリ程の非常に小さい花で、不思議なことに幹からよきによきと直接生えている。よく見ないと見つけることができないくらい、虫のような小さな花だ。香りはあまりない。この小さな花が実になるわけだが、実はとても大きい。実も、幹から直接生えており、ラグビーボール状の形をしている。

実を収穫して中を割ると、白濁した少しグロテスクな中身が入っている。甘酸っぱい、ほんのり薄いライチのような味で、その中に種が入っている。ガーナでは、これを周りに生えているバナナや色々な木々の葉でくるみ、発酵させている。チョコレートのプロセスの一番初めに発酵があるというのは、驚きだと思う。1 週間ほど発酵して、その後、天日で乾燥する。これで種の中が発酵してエキスが凝縮され、またこれを 1 週間位乾かす。そして、麻袋に入れる。1 袋が 64 キロ位の大きなものになるのだが、これを村から出荷する。

以上の、種から苗木を育て、その実を収穫して中をかき出し、発酵して乾燥し、出荷するところまで、ガーナでは、全てカカオの生産者が行っている。なかなか知られていないカカオの作り方だが、実際はこのように、環境にとって非常に重要な熱帯雨林で、決して豊かではない途上国の生産者の人たちによって作られている。

この森を守りながら、子どもたちを学校に通わせている生産者のカカオを、地球に優しいチョコレートとして皆で応援しよう。原料のカカオを作る人や、食べる人たちだけではなく、途中でチョコレートを作る人、運ぶ人、販売する人という、このチョコレートに関わる全ての人によりハッピーになるようにマインドシフトして、実際にアクションを起こしていこうというキャンペーンとして生まれたのが、チョコレボである。2006 年から本格的にスタートしている。

2. 活動の経緯

私が主婦として主人の転勤についてロンドンに赴任していた 2001 年頃のことだった。カカオは先物市場で取引しているのだが、1998 年から 2000 年の頭にかけて、市場価格が非常に下がった時があった。その煽りを受けて、色々な複雑な要因があるのだが、カカオの生産地である西アフリカ、主にコートジボワールなどで、子どもたちがカカオ農園で強制労働をさせられ、場合によっては人身売買されているというニュースが、BBC を中心に非常に多く報道された。その頃私はちょうどロンドンに住んでおり、テレビを見てみると、毎日のように子どもたちが悲惨な姿で鞭打たれ、傷口を見せたりするショッキングなニュース映像が流れていた。私は初め、それは 19 世紀やもう少し前の話をやっているのかと思った。しかし、ちょうどその頃に行われたことが報道されていたのだった。私はチョコレートが単に大好きな主婦だったのだが、その大好きなチョコレートの一番上流で誰かが犠牲になっているという状況の中で今の国際社会があるのだということとその時初めて知った。2001 年の 4 月、5 月、6 月頃のニュースだったので、文明の頂点にあるような気持ちでいたヨーロッパや日本にいながらも、2001 年の幕開けと同時に、私たちはまだそういう状況にあったのだというのを思い知らされたのがこの出来事だった。それで

Millennium Promise Japan

ミレニアム・プロミス・ジャパン

前にももちろん、コーヒー等の色々な問題の報道があったと思うが、私としては、チョコレートという自分の好きなもので初めて気づかされたということだ。そして、ちょうどその数か月後に、9.11が起こっている。そういったことから、21世紀の幕開けが非常に暗く感じられ、私たちは自分たちの安全保障をも危ぶまれるような状況の中で、自分たちの知らないところで貧困の問題や環境の問題等が起こっているのだということが、そのときに初めて自分事に感じられるようになった。

3. ガーナについて

世界中のチョコレートの約70%が、今は西アフリカで作られている。カカオの原産地は中南米だが、植民地時代を経て、今は西アフリカが一番カカオを作っている場所になっている。その中でも、日本で生産されているチョコレートの原料の70~80%が実はガーナ産である。

ガーナは、人口2300~2400万人程で、最貧困国ではない。最近は非常に成長著しい国になっていて、元はイギリス領だったのだが、西アフリカの中でもサハラ以南で最初に独立している国家である。自分たちがブラックアフリカの中で一番早く独立したということ、非常に誇りに思っている国民である。ミレニアム・プロミスの皆さんと3月にガーナに行ったのだが、ちょうど3月6日が独立記念日であった。非常に独立心溢れる、誇り高い国民性で、とても外交的で人懐っこい人々である。

歴史的には奴隷貿易の拠点となっており、周辺から捕まえられてきた奴隷の人たちがこの港から外に出て行った。ご年配の方はご覧になったことがあると思うが、よく映画やドラマの「ルーツ」等々出てきた、奴隷の人々が船に乗らされるシーンというのは、この場所が拠点となっていた。現在は世界遺産になっており、オバマ大統領が西アフリカを訪問したときに最初に演説した場所がある。お城のような形で、きれいなリゾート地のような雰囲気建物なのだが、中は洞窟のような牢獄になっていて、その中に入るだけで匂いがむせ返るような真っ暗な洞窟に、沢山の人が押し込められていた。出口は、船に投げ込まれる狭い出口しかなく、二度と戻ってくることはできないという、とても辛い場所だった。そして、奴隷貿易が行われていたその時だけではなく、今もことによっては、児童労働という形で、そういうことが繰り返されるのではないかという気持ちになるような場所だ。漁業などで子どもたちが働いていたり、土を捏ねて泥粘土のような煉瓦を作っている子どもたちがいたりする。国全体としては、GNPも最近急成長しており、12%という今は世界一の成長率を誇っている国である。しかし、未だに格差があるので、本当に貧困している場所や、そういう地域から流れてきた子どもたちや貧しい人々と、お金持ちの人たちとのギャップが、目に見えて明らかな場所でもある。

環境面に関しては、開発も進んでいるため、森林の破壊、生物多様性の問題といったものについて、大変重要な場所とされている。ギニア湾沿岸の下の方の地域というのは、西アフリカでも非常に豊富な生物多様性の宝庫である。マルミゾウというのは、アフリカゾウでも変わった種

類なのだが、絶滅危惧種となっている。森の中に住んでいるため、あまり大きくならずに、耳も小さくて全体的に小さい。今、このマルミミゾウはどんどん減っている。これもやはり森林の開発で道路が作られたり、農業の仕方ですべての生物多様性の問題で、この象に限らず、色々な種類の生物が激減していると言われている。森林に関しても、50年で熱帯雨林の90%がもう失われてしまっている。今植林されている森林で維持しているが、この1990年から2010年の間に33%の森林を喪失しているというような状況だ。

そこに住んでいる人たちは、決して豊かではない。カカオの生産者は相変わらず貧困が続いているので、その継承者が不足している。ましてや児童労働の問題等がフィーチャーされてしまったので、イメージも悪く、なかなかたがらないという問題も出てきている。

4. チョコレボの活動

以上を踏まえて、チョコレボは、オーガニックやフェアトレード等の、人と地球に配慮したチョコレートから、皆で応援することによって、このチョコレートのサプライチェーンに関わる人皆がこういった問題を少しずつ考えて、何か行動を起こそうというアクションとして始まった。従って、何かに反対する等というノーの姿勢ではなく、皆でより良いものをいいねという形で広めていこうという、ポジティブな活動として始まっている。

■ 2006年からの取り組み

2006年に立ち上がり、2007年のバレンタインを目指して、色々な企業や学校や団体等と呼びかけを始めた。目立つところでは、2007年に早速イオンやKDDI等、チョコレートを売るリテラーやITの企業等も一緒になって、キャンペーンに入ってもらった。スーパーの脇等に小さい売り場のコーナーを設けていただき、ボランティアの学生と一緒にフェアトレードやオーガニックのチョコレートについて声掛けをして、試食をしてもらうなどした。

また、マーケットリサーチを行い、フェアトレードやオーガニック等にどういった顧客の動向があるかということ調べた。これも、マルチスポンサーシップのような形で、本格的なインターネットのリサーチ会社をお願いをして、ソフト面に関しては、専門家や学生の方たちに質問票を作ってもらって統計をとった。このリサーチは、2007年、2008年と2年間継続して行ったが、2008年の日本でのフェアトレード意識調査の認知率等は、日本で初めての統計をとっているもので、調べていただくとデータ出典がチョコレボということで出てくると思う。

コンビニエンスストアでは、社長さんと座談会を開いて、次の年に商品開発を実際にやっていただき、売り場でのポップ、表示、掲示や広報物のデザイン等も手掛けさせていただいた。

また、老舗のケーキ屋さんやフェアトレードやオーガニックのチョコレートを使って特別な限定品のクリスマスケーキを作ってもらっていただく等の働きかけをした。チョコレートと、バレンタインやクリスマス等のオケージョナルなものを組み合わせて、学生や企業の方たちに楽しんで参加し

ていただいている。

■ ガーナ訪問

私たちは、「チョコを選べば世界が変わる」というコピーを出している。こちら側で、売り場が増えていく、あるいは知っている人が増えていくといった変化があると、その変化が現地でのようになるのか。これは一度、原産地に行ってみなければいけないと思っていたのだが、たまたま 2007 年に現地に行く機会をいただいた。

当時、世界中の 4 か国位の植林事業を行っており、CSR や環境・社会貢献で先進的な企業であるリコーの、現地でアグロフォレストリーを応援しているアメリカとアフリカの NGO の活動の視察に同行させていただいた。アグロフォレストリーというのは、森林農法とも訳されるのだが、森林を破壊せずに、森を守りながら作物を作っていくということである。単一作物のプランテーションではなく、幾つかの複合的な作物、あるいは自然の木々と一緒に作っていくことによって、よりサステナブルな森林を守りながら、きちんと収穫をしていくもので、先進的な研究が進められている。

ここでは児童労働等を全く見ることがなく、逆に、出迎えてくれた親御さんたちが皆、子どもたちを学校に行かせていることを、非常に誇りにしている人たちだった。皆がすごく笑顔なのだが、このプロジェクトを始める前は、皆さん暗い顔だったようだ。

元々この村は、木が古くなってしまったりして、なかなか収穫ができなくなっていた。それまで通りのやり方だと、収穫できなくなってしまった畑は放っておいて、他の場所を切り拓いて畑を作ることになる。この移動農法が広がっていくことによって、森の成長が追い付かずに森林が穴だらけになり、どんどん森林が減っていったわけだ。

それを、アメリカとガーナの NGO の支援や研究によって、収穫の減ったところを甦らせようというプロジェクトを行い、できるだけ化学肥料や農薬を使わずに森林の土壌が本来持っている栄養価を高めるように進められていた。その結果、村によって差はあるのだが、全体的に収穫が上がり、農薬を使わなくても作物が獲れるのだということが実証されている。それは、ただ植えておけばよいわけではい。実際には非常に手間のかかることで、虫がついているのを発見すればすぐに取りなればいけないし、何か問題があったら早めに処理しなければならない。人間でいうと、体質改善といった感じだ。後で注射を打つ、つまり、農薬や肥料のような対処療法ではなく、根本的な体質改善や漢方のようなことを、森に対しても行っているイメージだ。それによって森が非常に元気になり、生産者の人たちの幾つかのコミュニティでは、生産量が今までの 2 倍になったという所がある。また、この森は捨てて次に移ろうと思っていたところが、一生懸命やった結果、8 倍になったという村もある。その為、私が行ったときは、皆がとてにもここにこしていて、この結果を見てください、すごいでしょという感じで自慢げにされていた。

その人たちに、何が一番嬉しいか、収入が増えたら何をしたいかというインタビューを行ったところ、家を作りたいとか、もっと金持ちになりたいという声が出てくるのかと思ったら、大人たちの 10 人中 10 人、全部の人が声を揃えて言っていたのが、子どもたちが学校に行けるように

Millennium Promise Japan

ミレニアム・プロミス・ジャパン

なったということだった。これには、私も鳥肌が立つような気持ちであった。今までは一家に5人位子どもがいた場合に、何人かは学校に行かせることができるのだが、全員は学校に行かせることができなかった。お姉さんは小さい子の面倒をみるように我慢させられて、読み書きや計算もわからないという状況だったそうだ。それがこの村では、子どもたち全員を学校に行かせることができるようになった。それがまず奇跡的だということと、一番上の子どもを、寄宿舎のある高校にまで通わせることができるのはすごいことだという風に、皆が感動的に語っていたのが素晴らしかった。そしてそれが、寄付をもらってやっているのではなくて、自分のカカオ生産によって子どもを学校に行かせていることがすごいということをおっしゃっていた。

学校に行って子どもたちにもインタビューを行った。子どもたちに一番大事なものを絵で描いてもらおうと、サッカーの絵を描いてくれる子もいるのだが、カカオが大事だとか、動物が大事だといって、親がカカオを作っている絵を描いてくれたり、家族の絵を描いてくれたりした。NGOの人たちも時々行って、環境教育のようなものもやっている。文字を読めて、計算もできて、その上、持続可能なカカオ作りの大切さを学んでいて、この明るい子どもたちが次の世代にも同じようなカカオ生産をやってくれるだろうということを確認した。

ところが、ガーナというのは、今もそうだが、国でカカオ生産から輸出までを全て管理している。輸出作物なので、通産省のようなところの下部組織の専売公社であるココボードが一括管理しているわけだ。そして、2007年に私が行ったときには、全てのカカオを、ガーナ産で他の国よりも良い品質であるということで管理していた。確かに、ひどい状況のものではなくて、ボトムラインではとても良いものである。その代わりに、オーガニックで作っているとか、アグロフォレストリーで非常にケアして作っている特別なものも、他のものと混ぜて出されていた。

私が行ったコミュニティのものは、実際には一部がフェアトレードの団体のところに流れていた。しかし、フェアトレードのチョコレートになっているのは7%位で、残りの90%以上はやはり農薬を使ったりした他の作物と一緒にされて出されているということだった。一生懸命やっているのに、そこで差別化を図っていないのでは、そのNGOの支援が終わればそれで終わってしまうという気がした。そこで、もっとモチベーションを持っていただくために、この人たちのものだけを特別に持ってきて、それを特別にトレーサブルに分かる形にして商品開発をして、それを応援することによって、その人たちがそれを続けていくという仕組みができないかと考えた。そして、現地の人や、こちらのメーカー等の色々な方に相談を始めた。現地では、国際機関やココボード、周りのNGOやフェアトレードの団体等、色々なところに聞いたのだが、まだその時は、数トンという小さい単位だったため、この村の人たちのものを扱うのが難しかった。イギリスやヨーロッパの商社にも聞いたのだが、特別なシステムを作るには、500トンや1000トンといった取引でないとだめだということで、なかなか進まなかった。

■ ジェトロのプロジェクト

あるとき、ジェトロの開発輸入企画実証事業に申請し、現地の色々なステークホルダーを探していくと、ガーナで初めてオーガニックの認証をとったばかりの生産者の人たちがいた。この人

Millennium Promise Japan

ミレニアム・プロミス・ジャパン

たちのものであれば、ほんの僅かだけでも、それを特別に持ってくることができるのではないかと、これを実証してみようということ、ジェトロのこの事業の中でやらせていただいた。これが2009年、2010年の取り組みになる。

この生産者の人たちがアグロフォレストリーをやっていたので、こういう人たちがいるから知ってくださいという事で、日経新聞等と一緒に、日本で毎年12月に行われているエコプロダクツ展示会などでコラボ出店させていただいた。また、1月・2月のバレンタインシーズンには、ガーナの普段は原料までを作っている工場のラボラトリーで、試験的にチョコレートまでの最終加工を手作りで行っていただいて、これを正規の輸出品ということで輸入した。僅か数千個だが、ガーナ産のカカオで、アグロフォレストリーで、オーガニックで作っている人たちのチョコレートを初めて作った。

ガーナで作られたチョコレートというのは、国営企業が作ったもので、今のところ、ガーナ産のメーカーというのはそこぐらいしかない。現地では、炎天下で頭の上に乗せて売っていても溶けないので、そこで溶けなければ口の中では溶けないだろうというような硬さのものである。第一弾に作った2000個程のチョコレートも、それと同じような感じだった。非常にワイルドな味に仕上がっていて、向こうで食べるとけっこう溶けるのだが、こちらで冬に食べてみると、全然口の中で溶けない。

これでは、幾ら良いものであっても売れない。やはりおいしくなくてはいけないということで、次の年からは考え直して、日本で最終的に加工するようにした。日本のメーカーに協力していただき、ミルクは非常に優しく、ビターはガーナ産のくせを生かさず殺さず、あまり生かし過ぎると非常にワイルドになってしまうので、日本の方に受け入れていただきやすい加減のチョコレートの苦さで作らせていただいた。クーベルチュールという、原料になるチョコレートを使って色々なメーカーに作っていただくという趣旨である。しかし、原料だけ作っても、何の事だか皆さんになかなか伝わらないので、プロトタイプという形で、こういうチョコレートにしてみたいかがかというモデルを作らせていただいた。

これを2011年のバレンタインシーズンに、伊勢丹のサロン・デュ・ショコラという、チョコレートの殿堂のようなところでデビューさせていただいた。高島屋や小田急等でも販売させていただいた。ただ、バレンタインの2週間程の限定で、なかなかそれを長期的にすることは実現できていない。

2012年は、高島屋を中心に色々なメーカーに呼びかけていただき、メリーチョコレート、ヨックモック、メサージュ・ド・ローズ等の老舗の有名なチョコレート屋さんにもこの原料を使っている。おかげさまで、色々な媒体に掲載していただいたのだが、やはり実際に売るとなると難しく、色々大変な面はある。しかし、知っていただくという趣旨を、着実に皆さんに広げていくことができるようになっていく。

■ ガーナプロジェクト

では、チョコレートをこちらで買うと、どういうことになるかということを見せていかなければ

Millennium Promise Japan

ミレニアム・プロミス・ジャパン

ばいけい。2010年には、売上からではなくて、先行して3万本のカカオの苗木を種から育てていただき、これを、オーガニックで初めて認証をとった協同組合の人たちに平等に分配していただいた。協同組合は、450人位の組合で、それぞれが自立した農家の人たちである。地主さんたちや小作の農家の方たちそれぞれに、これはチョコレボの苗木なので、動物に荒らされたり、他の人に取られたりしないよう大事に育てますという書面を、協同組合から皆さんに配り、サインして戻すということをやっていただき、今は大事に育ててもらっている。ガーナでは、こうした活動を、ガーナのカカオ豆全体の意識のボトムアップにつながるから応援するというので、ココボードに公式のプロジェクトとして認定していただいた。まだ始めたばかりの小さい団体だが、そういった形で、生産者の人たちにはモチベーションをアップしていただき、それをイメージアップする形で、ガーナのココボードや政府の方たちにアドボカシーをかけながら、全体的にプラスのマインドシフトに努めている。森を守る生産者の人たちだけが儲かればよいのではなくて、そこが成功例として目立つことによって、後に続く他の人たちをまたその同じ輪の中に巻き込んでいく形にしている。

2010年の1月の段階では、種からまだ全部芽が出ていない状態だったが、4月には3万本全てのカカオを育ててくれた。それを今度は、苗木としてそれぞれの畑に分配し、そこからずっと育ててもらおうわけだ。2011年4月に、まだ緑が少なく、こんなところで育つかと思うようなところに第1本目を植えてきた。その当時は、トウモロコシの一種であるメイズがなっている、荒れ果てた感じの畑だったのだが、その半年後の10月に行ったときには、ここが同じ場所だと言われても全く分からないくらいの変り様だった。周りにはキャッサバや他のお芋等を植えていて、同じ場所にバナナの木も一緒に挿して、その下の日陰になったところでカカオの苗木が大事に育てられていた。地面が見えない位グリーンに変わっていたので、一本のカカオの苗木の周りで森が作られているという感じだった。初めの頃、日本でこれは森を作るチョコレートだと言うと、森を作るなんて何十年かかるのかと白い目で見られることもあったが、わずか半年で、小さい森の卵が確実にできているということを実感した。3万本全てが育つかどうか分からないが、こうやって大事に育てられていくと、周りに確かに森が作られていくだろう。

そして、もう一つ大事なことは、ここはオーガニックで作られているということだ。この周りでは、キャッサバやバナナのプランテーションの他にも、タロイモやオレンジ、パイナップル、ワイルドマンゴーやパパイア等も獲れるのだが、それらが全てオーガニックで作られるので、その子どもたちは安心してこれらを食べることができる。そういうものを食べて育ち、カカオが4~5年後に育つのだが、育ったカカオの収穫で得た現金からは学校に行くことができる。自給自足で安全な食べ物を食べて、森林を守りながらやっていると、水や周りの環境が変わってきて、前はいなくなっていたマルミミゾウが、最近では戻ってきている。私は残念ながら遭遇していないのだが、生産者の人たちから、ほんの1週間前にマルミミゾウがいたという話を聞いたりすると、ケアをすることによって自然が確実に戻ってきている状況であることがわかる。

昨年10月にガーナに行った際には、毎日映画社と東京書籍と一緒に来て撮影を行い、4月からの中学校の社会科地理の教科書についてくるVTR・DVDで、5分以上のボリュームでチョコレ

Millennium Promise Japan

ミレニアム・プロミス・ジャパン

ポのこうした活動が紹介されている。今までアフリカではケニア等が一般的に使われていたのだが、今回からは、ガーナを取り上げており、ガーナといえばチョコレートということで、チョコレートで森を作っている活動という事でご紹介いただいた。

■ 東北支援

このチョコレートを色々なメーカーにお願いしようと言っていたのだが、昨年3月11日の震災以降、どの工場も先に進めないということで、足踏み状態でストップしており、販売もできなかった。4月に、被災後1か月位であればチョコレートも食べてもらえる頃ではないかということで、JICAのアフリカ部の方やソニーの方や色々な方々が、色々な物資と一緒にチョコレボのチョコを持って行ってくださった。私自身もこの時は陸前高田と大船渡に、韓国のアイドルである超新星のコーディネーターとして主人についていった。その時にチョコレートを配り、1か月ぶりに子どもたちにチョコレートを食べてもらった。アイドルがいるので黄色い声上がり、久しぶりに子どもたちの笑顔を見たと言っていた。

次にガーナに行ったときに、ガーナの生産者の人たちにこの様子を写真などで見てもらった。すると、今まではどこのチョコレートに使われていたかわからなかったのが、自分たちが100%作ったこのチョコレートを、津波のあの子どもたちが食べて笑顔になっていることを生産者の人が喜んでくれた。これは期せずしてなのだが、食べる人と作る人というのが、震災を機に思いがつながる機会となった。生産者の人たちから、日本の子どもたちへというメッセージをもらい、その後、アクラの首都で行われたイベント、プレイフォーージャパンのイベントなどにも参加させていただいている。

それをまた日本の子どもたちに伝えたところ、現地で元々ボランティア活動をしているライオンズやロータリーやソプロチミスト等の皆さんが、チョコレートを常にもらっているだけではないので、自分たちもアクションをしたいと言ってくださった。ガーナでカカオを植えているのだったら、日本にも木を植えようという事になり、桜の木を植えていくプロジェクトがはじまった。去年の10月には、東京ドームで野球選手たちが日韓チャリティマッチを行ったのだが、そのときにガールスカウトの人やチョコレボも招かれ、桜の苗木の贈呈式を行った。8月1日に1本目を植えて、10月の後に25本植えて、計26本を今まで植えてきた。先日の25日に、また25本の桜の苗木を植えた。これは、小田急百貨店と京王百貨店が3月いっぱい買い物をした方たちにハートのシールを渡し、それを駅の構内の大きいパネルに木を描いて、シールを貼っていくたびに1枚のシールが10円になるというキャンペーンを行ったものである。あっという間に百貨店のお客さんたちが貼って行って、場合によってはハートに小さい応援メッセージまで書いていただいて、パネルが十何枚になったそうだ。合計で5万5千人以上が参加してくださり、25日に、全部ではなく7本だけだが実際に植樹をしてきた。現地ではその後、苗木のメンテナンスを地元の人たちがしていくことになっている。今はまだ調整ができていないが、調整ができた後に、小学校や中学校に寄贈するという目的で、今は地元の地主さんが中心になって、里親のような形で預かっていただいている。それを、地元の知的障害施設の就労支援作業所の社会福祉法人

Millennium Promise Japan

ミレニアム・プロミス・ジャパン

の方たちが、植木職人の仕事のトレーニングにもなるということで面倒を見てくださっている。

以上が今までのチョコレボの活動の流れである。チョコレボのロゴは、2006年にウェブ上で公募し、グラフィック界の大御所である浅葉克己氏審査委員長を務めてくださって選んだものである。コピーなども同じように皆さんに関わっていただけて選ばせていただいている。いわゆるプロボノという名前が出る前の走りのような形で、スペシャリティを活かして、マーケティングの方はマーケティング、コピーライターはコピーライト、デザイナーの方はデザインという風に、パンフレットなどもデザイナーの方が作品を提供して下さったりしてやってきている。今後もこのような形で、チョコレートが好きの方に、身近なチョコレートでできることをちょっとずつということで、沢山の方たちに関わっていただくようなキャンペーンをしていきたいと思っている。

5. DVD 鑑賞

6. 質疑応答

質問 1: オーガニックでカカオを生産するとなるとやはり手間がかかる。労働力が必要な時に、子どもたちを働かせなければ労働力が足りないということにはならないのか。

星野氏: 私の見ている限りでは、実際には子どもたちは働いていないが、逆の立場からいって、働かないで締め出してしまえばいいのかというと、決してそうでもない。場合によっては、必要に応じて手伝ってもらうこともあると思う。そもそも、その年齢の子どもに重労働を押し付けて、就学や体の健康に害を及ぼすような、成長に何らかの支障を来たすような場合が児童労働になるので、たとえば子どもが学校から帰ってきて手伝うというのは、逆に奨励すべきだと私は思う。ガーナでも多くの人たちが、それは是非やるべきなのではないかと言っている。その辺が難しいのだが、子どもがそこにいるとイコール児童労働と捉えてしまうと、子どもが農園から締め出されてしまい、次の継承者であるべき子どもが、なかなか親のカカオ生産を手伝えないという状況になってしまう場合もある。よく言われるのが、BBCなどが来て勝手に撮っていくのはいいのだが、彼らは土曜日だろうが日曜日だろうが来て、子どもたちを撮って行って、たとえばそれがカカオの農園の近くで手伝っていたりするの全部含めて児童労働として番組にされてしまうと、これは非常に心外だということだ。これは、実のところ現地の生産者やカカオに関わる人たちの意見でもある。だからその辺が非常に微妙な難しいところであるのだが、子どもが手伝うことを否定するのではなく、こうしたサステナブルなオーガニックや特別な環境にケアしたカカオ栽培というのは、早いうちからお手伝いさせたりして、農業離れしないような形で伝えていくというのが逆に大事ではないかと思う。今、私たちの買っているオーガニックのカカオというのは通常

Millennium Promise Japan

ミレニアム・プロミス・ジャパン

のカカオの25%増しという、非常に高い金額である。それだけのプレミアムを付けるのは、どうしてもオーガニックでは初めの数年間はイールドが下がってしまうので、その分を補足するためと、手間のかかることに関して付加価値をつけるためである。今、向こうでも他の色々なフェアトレードやレインフォレスト等の色々な認証が増えてきていて、もっと安い価格でも特別に取引しようというのが増えてきているので、その中でオーガニックの価格が25%というのは非常に高いので、その価値が上手く評価されずにちょっと残ってしまっている。それを一生懸命私たちがプロモーションしている状況である。だから、価格の妥当性と、あとはそれが生産コストを割らない形で現地の人たちがきちんと販売できて、しかも労働力としても、子どもが継承できるというのが理想的な形だと思う。

質問2：どのように外部のNGOの方たちと関わっているのか。

星野氏：元々アメリカとオランダのNGOが関わっていた生産者協同組合の後を、チョコレボが引き継いでいる状況である。認証を取るところまでをオランダのNGOが行い、その後、マーケットにつなげる部分をチョコレボが引き継いだので、上手く連携した形になっていると思う。海外の場合は、支援金がなくなってしまうと戻ってしまうケースが多いので、残された生産者の人たちがその後どうしたらいいのかわからないという状況がままある。従って、その辺をきちんと現実的に市場につなげるという役割をチョコレボは担おうと思っている。また、初めのアグロフォレストリーの例は、当時アメリカのNGOであるコンサベーション・インターナショナルから独立して、今はアフリカのNGOがやっているプロジェクトなのだが、自然保護地域でやっている非常に先進的な良い例である。今年からチョコレボは、トヨタ自動車の環境助成金で2年間のプロジェクトとして、地球・人間環境フォーラムと共同で、先進的なプロジェクトのNGOと、オーガニックの小さいコミュニティの協同組合を交換留学させるような形で、エクステンジワークショップを行うコーディネートをしている。一方的にNGOや技術者や政府が教えたり、先進国が教えたりするのではなくて、非常に先進的なアグロフォレストリーの現地の事例なので、現地同士で少し前の先輩と後に続く人とか、オーガニックの認証を取っている人と取っていない人等で交換して、自分たちの気づきでやっていただくものである。現地ベースだと、それぞれの人たちの情報が分断してばらばらになってしまっているが、たまたま私は幾つかの所を回って色々な違いが見えたので、これは一緒にやってもらいたい意義があるのではないかと考え、今それを広げる活動をしている。

質問3：オーガニックやフェアトレードには認証マークが必要になると思うが、日本の認証マークを使っているのか。

星野氏：オーガニックのニーズが日本国内にまだないので、日本のチョコレートのメーカーにオーガニックを作ってくださいと言っても、他のものが混ざってはいけないという厳しい基準を守るためには、もう一軒新しい工場を設立するくらいの規模の設備投資が必要である。従って、今のところ無理だと思う。今後、ニーズが増えていくとオーガニックができるかもしれないし、

別の技術によってそういうことができるかもしれない。従って、今チョコレボがやっているのは、プレオーガニックのような形で、ガーナの現地では原料まで全てオーガニックで認証を取れている工場でも、もちろん生産者の組合も JAS の認証も取れている。しかし、この原料を持ってきて、日本の工場に入れた途端に認証が取れない状況なので、しばらくは現地でオーガニック認証を取った生産者の人たちと森を植えるチョコレボの活動ということで認知していただくようにしている。フェアトレードに関しては、今は現地ベースでフェアトレードの認証やレインフォレスト・アライアンスの認証も取りたいという事で生産者組合がやっているが、認証を取るのも生産者の組合が負担して申請をしなければいけないので、それほど簡単に取れるものではない。認証が増えれば増えるほど、毎年アプライしていくお金も手間も生産者の負担になっていくので、その負担があつてお金があつて、なおかつ売れるということが必要で、これは全てが市場と関わっており、市場が広がってニーズが増えていかないと、なかなか難しい状況である。

質問4：国内では著名な方を動員するなど、色々な協力が非常に上手くできているし、現地でも比較的大きな団体の協力を得ておられる。これは極めて特異なケースなのかと思うが、最初の一步をどのように踏み出したのかそのノウハウをうかがいたい。

星野氏：単純に一言でいえば、チョコレートが好きだったということに尽きる。好きなので夢中になってやってしまっているところがあつて、おそらく他の方に関しても、皆さんわりとチョコレートが好きでおもしろいからやってみようということに関わってくださる部分があるかと思う。

質問5：カカオの他にも、たとえばコーヒーやコットン等のオーガニックのものがあるが、それらには目を向けられなかったのか。

星野氏：私は 9.11 を契機にしており気づきが遅かったので、イギリスの NGO のオックスファムの日本での立ち上げに関わらせていただいたりして、色々な NGO を回らせていただいて勉強をした。問題を総合的に大きい枠で捉えてしまうと、変化がなかなか見つけられない。大きい事象に対して何かアクションを行っても、やったことに対して何が返ってきているのかがわからないまま、いつまでたっても貧困は続くし、紛争は続くという事態に悶々としていなければならず、非常に虚無感を感じてしまう。しかし、チョコに絞れば、自分の周りから少し広がったとか、現時点で何らかの小さな変化があり、そうした変化を共有していくと、やったことが無駄にならずに何かが変わっていくのだという良い例になるのではないかと考えている。小さくて元気な良い例を作りたいというモチベーションでやっている。

質問6：実際に行動に起こされるまでにはさうとう色々な準備をされたのか。

星野氏：今の流れではサクセスストーリーのように見えるかもしれないが、実際には色々なところで問題にぶつかっており、挫折していることもたくさんある。その中でも、わりと長く辛抱強く関わってくださっている方たちのどこかで芽が出ているというような状況が、小さい変化に

Millennium Promise Japan

ミレニアム・プロミス・ジャパン

なっているのではないかと思います。その辺はやはりチョコの魅力で、関わっている方たちが自分たちも楽しんでやってくださっているということと、やったことが皆さんに喜んでもらえることになるという面がある。また、チョコレートのすごく良い特徴は、日本で特にそうなのだが、プレゼントできる材料であるということだ。一つのチョコレートは、これ自体がコミュニケーションツールになっていく。誰かに差し上げた時に、無理なく環境の問題や人権の問題についての話題を提供することにつながるので、色々な人たちに楽しく関わっていただける素材なのではないかと思う。

質問7：オーガニックを初めから狙われていたのか。

星野氏：ガーナから持ってこられるのがオーガニックのものしかなかったのだが、その生産者組合の方たちが本当に志が高くて立派だったので、これを応援すべきだろうということで、まずオーガニックから関わらせていただいた。あくまでも、オーガニックを広めているのではなくて、チョコを選ぶと世界が変わるということストーリーとして共有するというのが目的なので、わりと形にはこだわっていない。

鈴木理事長：今の生産者の方とはどのようなプロセスでお会いになったのか。

星野氏：2008年は苦勞してなかなか生産者にたどり着けなかったのだが、色々な方たちに会っていく経緯の中で、結果的にオーガニックに関わっている監査の機関の方などが幾つか紹介してくださった。

質問8：認証料が非常に高いので、かなり規模があって経済的に余裕がある農協や生産団体でないとなかなか認証を取れないのではないか。また、オーガニックそのものがやはり自然農法で化学肥料等を使わないので、生産量ががたんと落ちてしまわないか。

星野氏：生産量はやはり一時的に落ちてしまう。どこの国でも、視点を変えて、特別に環境に配慮して作ろうとすると、それをやりだすのは大変だし、周りを説得するのも難しい。オーガニックの認証を取るためには農薬を3年間は使うことができないので、そうした準備期間は苦勞するし、収穫も減る。たとえば、今日明日の食べ物に困っている人たちに、木を切って新しいものを植えてもらうのは、そうとうの労力と説得が必要である。虫が出て、一軒でも農家が農薬を使ってしまうと、周囲何キロはもう認証が取れなくなってしまうので、連帯責任の部分もあるし、コンセンサスをとっていくのは非常に難しいと思う。

鈴木理事長：私が一昨年ウガンダに行ったときに、日本人でアパレルで大成功している方とお会いしてうかがったのだが、今は、ウガンダは中国から非常に安い繊維が入ってきているので、存在価値を高めるためにオーガニックTシャツを作っているということだった。しかし、やはりオーガニックの認証を取るのは本当に大変だということだった。賞状のようなものが沢山あって、そこに認証がついているが、5つか6つ、これを全部重ねていって始めてオーガニックと認証されるそう。

Millennium Promise Japan

ミレニアム・プロミス・ジャパン

質問 9 : オーガニックのものは高く売れるという事だが、皆がオーガニックを作るようになると当然価格は下がってしまう。今は、希少性があるから高いといえる。そうすると、あまり値段が変わらなくなってしまったときに、我々受容者としては確かにオーガニックが望ましいが、彼らに本当にオーガニックを要求してよいのだろうか。

星野氏 : 今のところニーズがないので、作っていても余ってしまっている状態だ。生産者には農業協同組合がプレミアム価格を払わなくてはいけないのだが、今度は農協が負債を抱えてしまって行き詰ってしまい、毎年、農協がつぶれそうな状況だ。毎年、なんとかお客を見つけてきてほしいと言われて、私は色々なところを駆け回ってメーカーさんにお話ししたりしている。どちらかというと、生産者価格はあまり変わらない。25%は少し高いという話は確かに出ているのだが、それがたとえば10%に下がっても、きちんと買ってもらえばおそらく生産コストを割らずに、次のケア等もできるようになるだろう。チョコレートは、全てを売り切れていない生産者組合の負担になっている部分というのを、別途チョコを買い上げていただいたメーカーさんから売れた分の一部をもらって、苗木の基金等の色々な形でケアさせていただいている。

質問 10 : 一般社団法人としては、ネットでチョコを売ることが許されているのか。

星野氏 : 大丈夫である。このために会社も立ち上げて、そこが販売できるようになっている。アマゾンでも販売をしているが、それだけでは、知る人ぞ知る存在になってしまっている。オリジナルとして出している僅かな分だけは、ストーリーを語るものとして作らせていただいているのだが、今は、原料を使って一般のメーカーに仲間を増やして、あるいはショコラティエやホテル等の色々な方たちに使っていただくという輪を広げようと思っている。

質問 11 : アフリカは、エイズの死亡率が高いところであるし、孤児も多いと思う。以前、孤児がカカオを栽培している地主の所に集められて児童労働をさせられているという状況をテレビで見ると衝撃を受けたが、そういう子どもに対して何かできることはあるのだろうか。

星野氏 : ガーナの場合は、エイズに関しては発症率も低く、周りの国に比べると衛生環境もよいと聞いている。貧困国で作物も取れないようなところで孤児であると、その国から連れてこられたりすると聞いている。ガーナではそういったケースは減ってきていると聞いているが、全くないかと言われると、情報がとにかく分散しているところで、学校に行くのでも一番遠い子で21キロ歩いてくるようなところなので、そういう所にどういう人がいてどういう状況になっているのかを全て把握するのは難しい。

質問 12 : 世界金融危機のような経済危機になったときに、カカオも市場価格が下がって、それによって生産量も減って、生産者に対して直接悪い影響を及ぼしてしまったと思うが、現地の方々はどのようにしていたか。

星野氏 : カカオやコーヒー等に関しては、どんなに生産者がよいものを作っても、生産者の努

Millennium Promise Japan

ミレニアム・プロミス・ジャパン

力に関わらず、自分で値決めができず、全てがロンドンとニューヨークの市場取引に委ねられてしまっているというところが、非常に問題なのではないかと思う。元々、先物取引市場は全てそういうリスクを担保するためにやっているはずなのだが、それが今は逆の弊害となっている。取引市場が本当によいものや量によって左右されるのかというと、残念ながらマネーゲームで動いている部分があったり、国によっては政治的な問題が関わっていたり、色々とおあるようだ。生産者側ではなんとも変えられないところなので、そこがとてももどかしいところだ。

質問 13： 私たちにできることは、フェアトレードや適正な価格を決めることではないかと思うが、日本ではフェアトレードのマークがついているコーヒーが少ないと思う。やはり日本での認識というのはまだ広がっていないのではないか。

星野氏： どうしてもアフリカの問題に関して、遠いし、それはヨーロッパがすることだろうというようなイメージがあるようだ。コーヒーやチョコレートで、実は今現在つながっているということをもっと小さい頃から学校などで教えてもらえたりするとよいと思う。

鈴木理事長： ガーナはイギリスとの関係も深いし、独立心も旺盛で、プライドも高い。チョコレートの児童労働ということで、CNN や BBC であれだけ騒がれたため、NGO や国際機関からの圧力がかかっているのだから、それで児童労働が無くなっているのかもしれない。コートジボワールの方がカカオの生産量は多いが、コートジボワールはこの間クーデターがあったような国なので、ガーナ以外にもあの辺りでもう少し開発が遅れているような国だとまだあるのかもしれない。あと、ガーナのミレニアム・ビレッジで一番の問題は何かを訪ねたところ、ガーナは昔、ゴールドコーストと呼ばれて鉱山があって金がいっぱい出たので、今でも出るかもしれないという事で、違法に川や浜辺を掘っていてそこに子どもがいたりして、それが一番の問題だと言っていた。

星野氏： カカオに注目されてしまったものだから、カカオの業界からはとりあえずなくなっているのだが、水産業や日干し煉瓦等の、目に見えないところには相変わらず子どもが使われている。だからチョコレートの問題が解決すればよいということではなくて、問題は周りに分散している。こういう問題をきっかけに、たとえばカカオだったら食べたら植えるといったような、何かちょっと前向きにできることに関わってもらえるように、理解が広まっていくとよいのではないか。

質問 15： 現地の学校に通えるようになった子どもたちはどの程度の教育を受けているのか。

星野氏： 現地では教科書等の教材が不足しており、学校の先生も不足しているため、十分な教育でないことは確かだが、ガーナに関しては、教育の場では英語を公用語として普通に勉強している。国語や地理等も時々見せていただいている範囲では、けっこう高度な勉強をしていた。ただ、皆が皆同じ形で受けられるわけではない。家の事情でどうしてもすぐに学校に行けないとか、遠すぎて通えないとか、個別の事情があるので、同じ小学校 6 年生のクラスの中に、小学校 6 年生らしい子もいるし、18 歳位の子もいたりして、ばらばらである。義務教育の課程は、時期

Millennium Promise Japan

ミレニアム・プロミス・ジャパン

はずれるが皆さんやっているという感じだ。勉強ができる子は、飛び級をして先の学校に進んでいるようだ。

鈴木理事長：私たちはウガンダで教育支援をしている。MDGs の 2 番目が初等教育の貫徹という事で、今は全員を小学校に上げようという事なので、サブサハラでも 98%程が小学校に上がっている。何年か前までは、50%の子どもしか小学校を卒業できなかった。途中から入ってくる人は、最初に来られなかった事情があるので、無理やり MDGs だから行きなさいと言われてきても、やはり途中でドロップアウトしてしまうらしい。UNDP の発表を見ると MDGs の 2 番目の初等教育の問題はほぼ貫徹されたように見えるが、実はかなり問題があるのではないかとされている。それから、家で子守をしていたり、水汲みしていたりした子ども学校に行かせるようになると、赤ちゃんの面倒を見る人がいないので、実は乳幼児死亡率が増えているという問題もある。私たちはウガンダで他の NGO の支援を受けて小学校を作った。そうしたらその担当者から、育児所も作ってほしいと言われて驚いたのだが、実際は女の子が赤ちゃんを背負ってくるから、そういう子供たちのための赤ちゃんを見る場所が必要だということだった。ウガンダやエチオピアには、小学校卒業認定試験というのがある。日本でいうと、センター試験のようなものなのだが、小学校卒業の認定試験を受けるという事があるという事自体が、皆が出られるわけではないということだろうと思っている。

星野氏：箱もので学校は作るのだが、僻地に先生がなかなか来てくれないという問題がある。先生も、お給料があまりなくて、遊ぶ場所も何もないような僻地にわざわざ赴任してくれないということで、よい先生が集まらず、建てても結局何もならない。

鈴木理事長：トイレがないし、泊まる家もない。だからやはり良い先生が来てくれないというのが一番の問題かもしれない。

質問 16：今後 10 年のプランを教えてください。

星野氏：今取り組んでいるところが最貧国ではなくガーナということで、アフリカの中でも GNP もトップであり、民主国家として比較的長く安定していて、アフリカでリーダー的な存在になってほしい国である。そういうところで、サステナブルな活動が、国内外で認められることによって、小さい取り組みだが皆がいいねと思うようなものにして、他の所に広がっていくようにしたい。今はガーナに NGO を作り、イギリスでも関心を持ってくださっている有志の方々がいて、まだ組織化はできていないが、チョコレボ・ロンドンと名乗る人たちがいる。ガーナでの商品生産化についても現地の工場と話をしているところだ。ガーナは貧富の差が非常に激しいので、ガーナ国内でこういう商品を買える人が増えてきている。産地と市場が同じ国の中で成立するようになってくれば、遠い日本で幾ら売っても私が伝えなければ売れているかどうかわからないような状況と違って、やればやるほど、より人と地球に優しいものを頑張って作るという風になっていければ最高だと持っている。

質問 17：初めにに関わり合いを持たれたビレッジと、ジェトロの事業で対象にされたビレッジは

Millennium Promise Japan

ミレニアム・プロミス・ジャパン

同じなのか。

星野氏：違うビレッジである。本当は初めのビレッジの笑顔の人たちのものを作りたかったのだが、どこにお願いしてもそのルートは今は無理だといわれた。色々な情報を集めて今できることを探す中で、現地で今のところと出会った。今年からは、そのずっとやりたかったところのプロジェクトと、今のプロジェクトをつないで、両方応援できるようなことをやらせていただいている。

質問 18：最初に訪問されたビレッジと、その後の農業生産者団体とはどのようなきっかけでアクセスしたのか。

星野氏：それぞれ、別の方たちからのご紹介である。色々見せていただいた中で、やはり非常に思いがあって、中心になっている方たちが非常に真面目にやっていたらっしゃる方たちだった。

以上